

多言語対応・ICT化推進フォーラム 「海外事例から考える日本の公共サイン」

講演者：聖心女子大学文学部日本語日本文学科 准教授 岩田 一成 氏

海外事例として、オーストラリア、香港、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマークの公共サインを調査した。そこから日本のサインの改良点を次の通り3点にまとめた。

テーマ1:短縮表示を考える

日本の地名や道路名のサインは日本語の下にローマ字があり、駅が「Sta.」などと短縮されている。海外では「ストリート」が「St」など、慎重に語彙を選んでよく使われているものを短縮している。一般に、日本人はなんでも短縮している印象。例えばこの看板は「磯子駅入口南側」が「Isogo Sta. Ent. S.」となっている。3ヶ所も省略されている言葉があるので、意味を理解するのが難しい。日本人は日本語を読めるので「S.」が南などと分かるが、これだけ省略してしまうと、外国人がローマ字部分を見た時に伝わるかどうかは疑問。

また、ガイドラインはあるものの地域や施設によって省略の仕方もまちまちである。「Station」等いくつかの省略パターンを集めて外国人留学生に提示した調査の結果、「Sta.」がステーションだと分かる人は英語話者で57%と半数以上であることが分かった。



	sta.	stn.	st.	br.	J.H.Sch	Ginza E.	平均
	Station	Station	Street	Bridge	Junior High School	Ginza East	
英語話者 14名中	8	6	10	1	8	4	
理解度	57%	43%	71%	7%	57%	29%	44%
対象全体 100名中	45	15	41	16	33	26	
理解度	45%	15%	41%	16%	33%	26%	29%

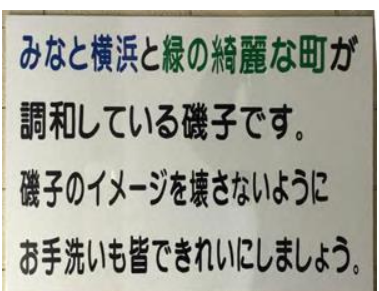
表1 英語話者の理解度、対象者全体の理解度（三枝ほか印刷中）

テーマ2:防犯サイン

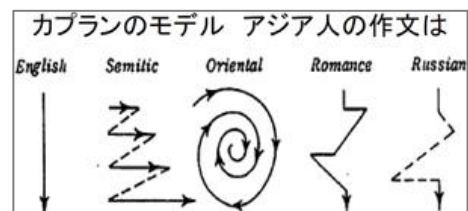
日本語の多言語サインは、英語を併記するか、日・英・中・韓の4言語で表記するかが主。ところが「防犯カメラ設置」「警察官立寄場所」などの防犯サインは、中・韓のみであったり、普段はあまり記載されないポルトガル語やアラビア語が書いてあったりする。その国の人の立場からすると、防犯のものだけ本国語が書いてあったらどんな気持ちになるだろうか。犯罪者ではない外国人はもちろんのこと、それを見た日本人にも先入観と偏見を与えてしまうと思われる。センシティブなサインなので、日本語のみ、もしくは一般のサインと同じく英語併記にするなどの配慮が必要。

テーマ3:やさしい日本語、訳せる日本語

日本語には持って回った表現が多いが、長すぎる文章や二重否定などは翻訳すると核心がぼやける。例えばこのお手洗いの看板では町の調和や緑などの話から入っているが、言いたいことは「お手洗いをきれいに」である。この長文を翻訳しても多分外国人に伝わる文章にはならない。すべての看板に多言語表記ができない以上、アプリで文字を撮って翻訳するという場合もあるので、訳せるかどうか、メッセージをストレートに伝えてるかどうかという視点が必要である。



アメリカの言語学者の研究によれば、英語作文は表現がストレートだが、アジア人の文章は渦巻きのようにぐるぐるしているという。日本人はストレートな物言いに抵抗があるが、外国人はそれに慣れているので、普段から意識してストレートに書くべき。英語併記をする際に英文ではストレートに表現する。日本語だけを表示する場合はその意識が必要。日本語を書く際には4プロセスがある。すなわち"試みる日本語"、"表す日本語"、"伝える日本語"、"訳せる日本語"となる。自分達は「変化球を投げたがってしまう」という自覚を持つと良い。



(平成29年度作成)

「多言語対応・ICT 化推進フォーラム」

参考資料配布：<http://www.2020games.metro.tokyo.jp/multilingual/council/#m07>